

伝統構法でつくった土壁の家

(松川村)



1

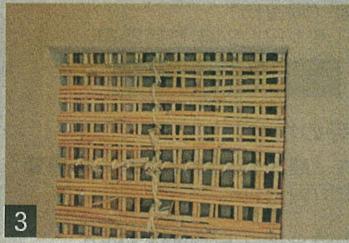
北アルプスのふもと、松川村にある白壁の家。大きな屋根に覆われた腰の低い据わりが良かったが、のどかな田園風景に溶け込んでいた。

建築家と職人技術のコラボで広がる可能性



2

1 大きな屋根と腰の低いプロポーションが特徴的
2 木組みによる吹き抜けの空間
3 70歳過ぎの地元職人が良質な葦を選びすくって仕上げた木舞掻きの土壁



3

昨年完成したこの家は、岐阜県多治見市で暮らしていた農中良二さんが定年退職を機に、一家で同村にイターンするために建てた。友人の誘いで偶然、安曇野のマラソン大会に参加した際、この地の風景にほれ込んだ。「ついでのみか」をつくるにあたり、農中さんには強いこだわりがあった。自ら調べたどり着いたのは、「柔

柔構造で耐震性担保しながら「快適な暮らしを楽しめる家」



4

施主の農中さん(右)と棟梁の宮澤さん

構造で耐震性を担保する伝統構法でつくり、なおかつ快適な暮らしを楽しめる家」。農中

さん(尾日向辰建築設計事務所)と棟梁の宮澤郁夫さん(宮澤建築)が実現した。農中さんからは「三位一体の家づくり」が実現した。農中さんからは「三位一体の家づくり」が実現した。農中さんからは「三位一体の家づくり」が実現した。

工を頼んだ。金物や筋交いを使わず、木組みと土壁でつくったこの家は、車庫を含め2階建て・60坪余り。構造材にはヒノキ(根羽村森林組合)、板材は根羽スギを使用し、ほぼ100%県産材。尺角の高さ6mの2本の太黒柱が棟木を支え、4・5寸勾配の切妻屋根がかかる。間取りは伝統的な田の字型(6間×6間)で展開。中央部は吹き抜けで、茶の間やいろいろな部屋を囲むスペースがある。長ホソの四方差しに込栓・車知栓、木舞掻きの土壁。職人の技術

を駆使した仕事は「やっていて楽しかった」と宮澤さん。尾日向さんは「単に昔の家をつくるのでは意味がない。土壁の良さ(調湿機能など)を生かしながら、寒冷地にふさわしい断熱性能を備えた暮らしやすい住宅を目指した」。完成から約1年。農中さん一家は「コウヤマキの浴槽でんびりと入浴を楽しんだり、庭の畑で育てた「安納芋」をまきストーブで焼いて知人に振る舞ったりと、松川の家での暮らしを満喫している。尾日向さんは、宮澤さんについて、「技術知識がきちんとして、新しいことに取り組むことに意欲的で一緒に仕事をしやすい」と評す。宮澤さんは、尾日向さんについて「建築家のデザインは仕事に取り組んだ」と感心した。お互いの得意分野を生かすことができた」と振り返る。「まずは農中さんのようなお施主さんが暮らす住宅を完成させたい。設計者と職人がコラボレーションした伝統の技術を生かした家づくりの今後に期待がかかる。」

新建新聞 11月25日付